

天武挽歌と陰陽道

——天武挽歌論序説——

湯川久光

一、序

天皇の死を悼む挽歌が万葉集中わずか二つの場合に限られるのは周知のことであろう。天武天皇に四首、所謂「天智挽歌群」(卷二・二四七―一五五)の九首とを数えるにすぎない。しかしながら、挽歌史の論議は常に後者の例に集中し、天武挽歌四首を顧ることは不当なまでに稀なことであつたといつてよいだらう。^(注1)ある意味ではそうした偏重が生ずるのも理由のないことではない。双方を単純に比較して、量、質ともに「天智挽歌」の優位を否むことはできないし、実質的な万葉挽歌の初出という光榮すらそれは与えられているのだから。

だが、わずか二例の天智挽歌の一方のみを重視して構想される挽歌史なるものは、明らかに片手落ちである。

その上、天武没後、三年に突如として柿本人麿による雄大な挽歌群が登場する情況に当面歌は位置する。おそらく、挽歌の史的展開の中では、そうした過渡期こそ重要な地点になる筈である。従つて、天武の死を彩る四首に個有な性格を分析し、見定める手続きこそ、挽歌史の構想に不可欠な視座なのである。

^(注2)別稿で、万葉挽歌の始源の契機を中国挽歌の受容に求める視点から、天智挽歌群が単に一回的な存在である所以を説いた。この小論では、この延長線に沿ひ、通説に反する「天武挽歌」の独自性を二首の短歌において検討する。当該歌の新たな読みが存外、挽歌史の構想に重大な組み換えを要求すると考えるからである。

二、短歌二首の異端さについて

まず、次に本文を引用する。

一書日、天皇崩之時太上天皇御製歌二首

燃火物 取而裹而 福路庭 入澄不言八 面智男雲

(卷二・一六〇)

向南山 陳雲之 青雲之 星離去 月矣離而

(卷二・一六一)

一書の形で伝えられた太上天皇の短歌二首には未だ定訓が認められていない。従って、両首の意味にも決定的な定説が確立されているわけでないのは当然である。しかしながら、先学の論及の成果を吟味しながら継承すれば、おのずと大過ない解釈の余地は十分に保証されるのも論をまたない。

まず、表現の上から当面二首を検討すると、特異な原文の表記法が注目される。「福路」(袋)「向南山(神山)」など、集中ほかに例を見ない用字が用いられている。更に、「青雲」、「星離、月離」などの句も問題を孕む表記といえそうである。一体に、実作者と表記者を混同し、同一視することは危険だが、当面の場合は積極的に、双方を結びつける必要がある。短歌の内実とその漢語的な用字法とが不可分な関係にあるためだ。具体的に指摘すれば、「向南山」には天子南面たる思想^(注4)があろうし、「青雲」は五行思想からの影響を無視できない。更に、「星

離・月離」なる発想は伝統的な和歌の素材から逸脱した着眼でありながら、一方漢詩文学には広く検出しようという指摘^(注6)を見る。かかる趨勢に即せば、先の杞憂は不要だし、用字法の傾向から、当該歌の中国文芸との親しさを推定できることになる。

さて、用字法の特異さと並んで、二首の内容そのものに外来思想の反映を考える向きも既に存在する。第一首の、燃えている火を取って包んで袋に入れるという行為だが、こうした突飛な行動の類例を、古文獻に見出すのは難しい。せいぜい中国の散楽や仏典にその典拠がある^(注7)うかと想像するほかはあるまい。まして、人ならぬ雲にそうした幻術じみた行為が可能とする前提で、それに類した至難の術——おそらくは、大君の魂をとどめるか、あるいは、大君の生命を再生させるといったことか——を、雲に実現してくれと期待するのがこの短歌の大意である。

日本の和歌の伝説の伝統的な雲への願望の現われは右のそれと全く異なる。情なく雲よ山を隠す^(注8)など希求するとか、雲に恋人の面影が映ることを望む^(注9)かというのがせいぜいのところであるから。それ故、当該歌の如く、雲が火を包むといった異能さは、古代日本人の想像力の埒外に属すと断言してよい。そして、ここに当面歌に外来

思想の導入を仮定する根拠が生ずるわけである。

今一首の短歌にも雲は等しく重要な素材となつてゐる。全体が何らかの寓意を宿しているらしく、雲が星から離れ、また月からも別れていく有様を歌うだけである。現象的にはそれで一応の納得はいくのだが、天武の死と右の出来事とがいかなる必然性を以て結びつくのかは明確ではない。先にも寸言したように、星や青雲を素材にすること自体、日本の古代人にはなじみの薄いことだし、まして人の死にこうした発想が選ばれることは全く孤立的なことだ。安易に作者の個人的な資質に結びつける印象批評で、事足りると済ますわけにはいかない問題を含む。何故、天武天皇の死に限つてのみ、挽歌史に突出する着想が可能であるのか、それを問ひ直す手続きを欠く論説は、ついに思いつきの領域を出ないというべきだろう。

この点で、夙に賀茂真淵が「大後の御哥のさまならず。から文学べる男」の手になるかと見た着眼は、卓見(注11)というべきだと思われる。表現の不思議さの由来を暗示する方向を示し、間接的にはあるが、当面歌に代作の可能性を想定しているためである。真淵以降、彼の提言の如くに中国文学の影響下に当該二首の位相を求める成果の一端は、先に紹介した。就中、ここで重視すべき

は、解釈をめぐる小島憲之氏の試案であり、担い手に狙いを定めた中西進氏の指摘である。

便宜上、後者から見ていくが、注目したいのは二首を陰陽道の思想に拠つたものとし、実作者を陰陽師に比定する点である。勿論、このような立場は男性による代作を主張するわけで、当該二首を「女の挽歌」の系譜に組み込む見解(注12)に鋭く対立するものといえよう。序節に論じた天武挽歌の独自性を強調する私見に、これは有利な立言であり、氏の指摘を積極的に援用する形で小稿の論証が果されることになる。ただし、中西説は簡略な注(注13)で示された見解で、それ自体が十全な根拠を明示するものではない。従つて、右の見解の実効性を吟味し、陰陽道との関係から当該歌の解釈を図ること。更に、その担い手に照準を定めて天武挽歌に陰陽道が関与する必然性を考察していかなければならない。

三、短歌二首と陰陽道の要素

当時に陰陽道がどの程度まで受容されていたか、それがまず大きな問題となる。従来あまり顧みられることなかった分野だが、最近の研究の進展は天武朝の陰陽道の受容が極めて高いことを明らかにしている(注14)。陰陽思想にもとづく代表的な事例の一つは、祥瑞と災異であるが、

その歴史的な分布状況は天武朝で際立っていることが報告^(注15)されているのである。

更に、天武天皇自身も陰陽五行説に深い造詣を持つことはよく知られているよう。日本書紀の天武評に「壮に及びりて雄抜しく神武し。天文・遁甲に能し」(天武即位前紀)なる記述があるためである。易を核に天文・曆道などの諸術道の組み合せに成り立つ陰陽五行説は、旧来の呪法にとつてかわり律令政治の吉凶を卜する典拠としての位置を占めていくわけだが、その実質的な出発はほかならぬ天武朝に比定してよい。天武自ら天異を目標し、それを壬申の乱の予兆と捉えること^(注16)。新王権の樹立直後に陰陽寮、占星台の創設を断行したことなど、天武の時代における画期的な陰陽思想の活況を知ることができるのだから。従って、当該歌に陰陽思想の影響を想定する説が成立する外的要件は満たされているといえるわけである。

次に、当面の短歌に形象される事柄が具体的に陰陽思想といかなる照応を示すかを検討する。ただ、この問題を考える場合に、留意すべき点がいくつかある。その一つは、陰陽道の存在態の曖昧さである。下出積與氏の発言はこの事情を適切に要約する。すなわち、

それでは、陰陽道とはなにか。それは古代中国の

陰陽五行説にもとづく俗信で、当初からいわゆる陰陽道の形で日本に伝わってきた、というのが通説である。しかし、この通説は誤りである。陰陽道が中国に起源をもち、中国で発生した陰陽思想や五行説を母胎にしたものであることはいうまでもない。だが、中国においては、その陰陽思想や陰陽五行説は、結局のところ道教や儒教を構成する要素になっていたのであって、それ自身として独自の道を展開していくことはなかった、ということを見逃してはならない。儒家や道家とならべて、一時的には陰陽家を認めたことはある。しかしながら終局的には、思想としての陰陽思想は存続していても、具体的な形としての陰陽道という展開はついになかった^(注18)のである。

引用が長くなったが、氏の指摘は重要なことを示すと考えられる。その一つは、陰陽道自体が完結的な思想ではなく、各説の集約体であることだ。当然、ここには絶対的な範例^(注17)だけでなく、個別の判じものの要素を抱え込んだ許容度の広い在り方を呈することになる。場合によっては、典拠としての全き類例を検出できない事態が起きても不思議ではないわけである。例を当該歌の大きなモチーフとなつている「雲」とれば、『周礼』に次の記事

がある。

保章氏、以五色雲二辨吉凶之稷象。

雲の色彩によって物事の吉凶を卜占する方法の行われていたことがわかるが、同じ一つの現象に常に特定の解釈が保証されているわけではない。むしろ、互いに矛盾し合うような結論が予言され、導かれる傾向が顕著なのである。^(注20)それ故、当該歌の出典を明らかにすることはまず望めず、素材の共通性、発想の類似性を確認することが、当面の影響関係を保証するための手続きになる。

具体的な照応はまず素材の点で指摘できる。一六一番歌に見える雲と星との結びつきは、次の例と一致する。

有雲如丹虵、随星後大戦殺将

(太平御覽所引「兵書」)

赤い(丹)虵に似た雲が、星に随って行く天象の有様は、万葉歌の構図と等しいものだ。海彼の例はそれが戦乱の兆しとして理解されている典型的な陰陽五行説の現われである。このほか、雲や星が単独でとり上げられる場合にも中国の文献は陰陽思想による予兆の例が圧倒的である^(注21)と認めうる。一方、日本の伝統的な発想にかかる天象への関心が乏しく、この素材の組み合わせから陰陽五行説との親しさが無視できないことになる。

今度は同じ一六一番歌の詞句たる「星離」「月離」を

検討する。両者に関連する用例を小島憲之氏の指摘から引用すれば、次のものをあげることができる。^(注22)

有豕白蹄 烝涉波矣

月離于畢 俾滂沲矣

武人東征 不皇他矣

月離于箕 風必揚沙

(『詩經』小雅「漸漸之石」)

月離于箕 風必揚沙

(『春秋緯』)

右の例は共に月と星との離別する有様を述べ、将来の予兆としての意味を示すものと考えられる。前者の例に鄭玄の注が「將有大雨、微氣先見於天、以言、荆舒之叛、萌漸亦由之出也」と記す。従って、後漢末の時代に月が星から離れる天異を人事に結びつけ、予兆(萌漸)^(注24)と見る発想があったことを知りうる。後者の例も『書経』に類似例があり^(注25)、後漢以降の緯書に広く見出すことができる発想である。このように、一六一番歌にのみ突出した印象を与える素材の取り合せは、中国文学には広く検出することが可能であり、それらはいずれも陰陽思想と緊密な関係を持つことが明らかである。

それでは、陰陽思想が死と結びつく必然性はあるのか、次にこの点に言及する。結論を急げば双方の関連は親しい。典型的なその例は、後漢の和帝への誄(崔瑗作)

に認められる。

玄景寝曜

雲物見徴

馮相考妖

遂当帝躬

三載四海

還密八音

如喪考妣

『芸文類聚』卷十二、帝王二

天体の異常を観測し、それが帝王の死の予兆であったという先程来の構造と等しい恰好である。天子の死がこのような形で表現されるのは、人の死もまた陰陽五行説の影響の下に捉えられていた好例と見てよい。その上、右の作が日本の「殯宮挽歌」に多大なヒントを及ぼした誄であることは看過すべきではない。『芸文類聚』を介して、古代の知識人はそうした発想を確実に知りえた筈だから。

更に、文献のほかにも陰陽五行説と死の結合の強さは痕跡を残す。例の高松塚古墳の内部に描かれていた壁画は、まさに陰陽思想にもとづくものと見るほかない。王朝の貴人の死が「方位と祥瑞災異の易学的な世界観によって莊嚴」^(注26)に彩られた事実は、死と仏教の側面にのみ向

いていた古代宗教観に是正を求める重さがあるろう。当然、陰陽思想が天武の挽歌に介在してくることは、当時の在り方から見て何ら不自然ではないのである。

右に陰陽五行説と死の結びつきをめぐり、彼我の例に具体的な対応関係を見てきたわけだが、ここで陰陽思想の關係を見直すことにする。

かくの如くして儒道二家に於いて戦国中葉から末期にかけて用いられて来た陰陽二儀の思想は、戦国末の鄒衍によって五行思想と関連せしめらるるに及んで、陰陽五行の思想となつて、五徳終始の説を生み、漸次に天子の興亡、易姓革命、家相人相、冠婚葬祭、九星風水等に関連して、社会万般の吉凶に関する迷信的思想に墮するに至つたものようだ。^(注27)

右の吉田賢抗氏の要約が当面の課題に意を尽している。就中、天子の興亡に陰陽五行説が積極的にかかわる由来に留意したい。陰陽師はむしろ当然のこととして死一般に対処するわけである。^(注28)従つて、死と陰陽五行説の關係は極めて緊密と結論づけて大過ない。換言すれば、一六一番歌は素材、詞句、発想のどの上からも陰陽道的発想に支えられたものと見る必要があることになる。

以上に述べてきた前提によつて、一六一番歌に私解を示せば、次のような解釈が可能にならう。すなわち、

(天武が生前賞美した) 向南山に棚引く雲、その青い雲が(以前に位置していた) 星から離れてゆく。そしてまた、月からも離れていく、と。この一首の中心は青雲が星や月から離れるという天象の変化に求めるべきだろう。無論、それが陰陽思想を媒介に何らかの寓意を宿すわけである。その寓意とは何か。先に言及した小島憲之氏の試案(注29)をまず引用しておこう。

何れにしても暗々たる天上の様子によって(天武天皇の) 崩御を暗示するものと思はれる。二云云。

右の小島氏の指向を基本的に是認すべきものと考えられる。ただし、当該歌が天皇の死を暗示するという消極的な意味合いで捉えることに異を唱えるべきだろう。むしろ、この表出を意図的な意匠として作者は工夫していたに違いないからだ。言い換えれば、こうした風変りな表現こそ陰陽思想にとつては、積極的な天子の興亡を形象化するものと捉えられた筈なのである。具体的に述べれば、神山(神聖な天子の象徴)に引く雲は、天武の治政を形象していたと見られる(注30)。それが青雲であったことも陰陽五行説と無縁ではない。そして、その雲が安定した秩序を狂わし、月や星から離れる現象は、先海彼の例と等しく将来の予兆になろう。すなわち、それは天武の死の陰陽道的形象なのである。崩後の作に、予兆としての

天子の死を歌うことを疑うむきもあるうが、結果から帰納して徴候と知る傾向も十分あったことを想起したい(注32)。むしろ、天体の変異を天武の死の兆しとして理解できなかった悔いの念をここに見ることも可能なのだ。

陰陽五行説に通曉しない者、延いては後代の我々にとって、右の一首はただ死の暗示を読みとることしか適うまい。だが、先ほどから検討してきた、陰陽道の文脈からは右の試案は自然なものと映る筈だ。そして、この一首に表出される心情も比較的想像し易いものと思われる。天武の死によってもたらされる崩壊を歌うことで喪失感や寂寞たる空虚さが推定できるし、天体の変異が天武の死と結びついたことの後悔、それに伴う自らの無力感の表現とも理解が可能だ。また、天体の位相の俄かな転移が死後の人事を予告するなら、将来への不安すらそこには込められていよう。一六一番歌は繰り返せば、陰陽五行説による天武王朝の亡滅と、その予兆を天象の変異によせて表現したものといえるのである。

さて、今一首の短歌一六〇番歌について再び検討すべきだが、この点に旧来の説を超える何ものかを加えることはできない。ただ、若干の見込みをここで、述べるにすぎないのである。しかしながら次の点は注目するに足りる重要なものだ。すなわち、燃える火を袋に包むと

いう幻術じみた行為は、陰陽道の妖術に似通う要素である。たとえば、隋代一の陰陽家である蕭吉は、前代までの陰陽五行説を集大成する一方、火を以って邪氣を払う術にたけていたという。^(注33) 正統的な予言やト占の裏芸として、右に触れた妖術を操ることが陰陽家の在り方なのである。それ故、当該歌にも陰陽道の影は色濃いと見て決して誤りはないと考える。一六一番歌と当該歌とが同一の題詞の下に一括されている事実が、右の推定を保証するからである。

以上に実証してきた陰陽五行説の要素を持つ二首の短歌は、何故天武天皇の死のみにかかわるのか。節を改めてこの問題を当面歌の作者像と関連づけて論じていこう。

四、天武挽歌の実作者

前述したように、当該二首の実質的な担い手は陰陽師的人物でなければなるまい。持統女帝は形式作者にすぎないわけである。それ故、この二首の作者を特定する折には、陰陽五行説の日本における受容史を辿る方法が有効な手掛りを提供することになる。

陰陽道に関する記事は継体七年六月の条、百濟から五経博士、段楊爾が貢上されたのを初見とする。以降、欽

明十四年六月の条に、易博士、曆博士の来朝があり、更にはト書、曆本の輸入が相づく。この段階では本格的に陰陽五行説が応用された痕跡は乏しく、それが一変するのは、推古十年十月の百濟僧、觀勒の渡来を待たねばならなかったようだ。この折に、渡来の書生に交り、日本人らしい書生山背臣日立も觀勒から陰陽五行説を伝授されたと記されている。自前の陰陽師がよりやく養成されたのである。そして、確実に以後、この思想は王權の権威づけに重要な役割りを果し、天武朝に一つのピークを築くわけである。

天武自身が陰陽道に通曉し、自らト占をよくしたことは既述した。そして、その知識が伝えられたのは、先に示した書生たちの後継者を介してであったことは見当がつく。おそらく壬申の乱の当初に、自軍の勝利をト占した例の挿話の背後には、天武に付き添い、ト占に一役かった陰陽師のブレンを想定する方が自然であろう。易と一天皇が陰陽五行説を駆使し、彼ら専門家を凌ぐ域に達していたとは考えにくいからだ。先のエピソードの実相を、書紀の伝える額面通りに理解するわけにはいかないのである。

叛乱の決起にあたり、天武に始めから同道していた舎人の中の誰か。その人物こそが陰陽道に通じていて、あ

の挿話の実質的な采配者だった可能性が高い。^(注34)そして、かかる人物ならば、天武の崩御に陰陽道の思想にもとづく挽歌を作歌する必然性があるに違いない。天武との親しさ、挽歌の特異な内実といった条件を彼らは申し分なく満たすのだから。

天武側の勝利の後に、創設された陰陽寮や占星台は、多分に論功行賞の意味合いがあったのではないか。勿論、その職員には天武に貢献した陰陽師たちが配せられ、就中、壬申の乱に従軍した舍人もこの一群に含まれていたに相違ない。かかる人々にとって、天武の死が陰陽五行説で莊嚴に彩られるべきと映っても当然である。彼ら陰陽家の権威は天武によって正当化されたのだし、その点では天武は陰陽五行説の権化ですらありえた筈だから。ここに、万葉挽歌に唯一、突出する発想を根幹とした当該歌が天武の死にのみ作歌された所以がある。

右のように、当該二首の短歌の担い手を天武側近の陰陽師、並びに陰陽道に通じた舍人に限定し、その発想法の自然さを論証しても依然として課題は残ろう。すなわち、一書という形であれ、持統女帝の代りに彼らが作歌できるかという点である。天武挽歌の場合は、公の外廷の儀礼ではない。より私的な内廷のサロンであった筈である。額田王が天皇の代作歌を作る論理が当面の状況では

機能しえないわけである。従って、代作といっても初期万葉の如き概念を援用しては、この実相は攪みそこねる怖れが生ずる。

そこで、先に寸言した壬申の乱に天武と同道した舍人たちの存在が見直されてこよう。とりわけ、帰化系の出自を持つ書首根麻呂、書直智徳、調首淡海らのグループ、及び山背直小林、山背部小田らの人々である。この舍人は等しく陰陽道に心得のある可能性を共有し、乱の初期から天武に同行していたという側近中の側近である。それ故、天武の妻たる持統女帝とも親しい。革命後、彼らが律令官人として体制に組み込まれようと、興亡を賭した主従関係の紐帯は強靱なものであったと見てよいだろう。持統女帝の私的な天武哀悼の歌の場にそうした彼ら舍人が加わっても、決して責を負うことはないのである。

あるいは、天武の死を追悼する挽歌を奉上了たと考えてもいい。公式の儀礼が盛大にとり行われる中に、埋められぬ空隙。それを満たす個人的な挽歌、それこそが苦難を共にした彼らの矜持であつてよい。

このようにして、持統女帝に献上された挽歌は、それが伝承される過程でいつしか持統の御製と紛れたのではないか。当面の短歌は所謂、第一義の資料とはいえない

「一書」の所伝である。また、持統を太后と記することなく、後代の書式たる大上天皇と伝える。文献に定着するまでの長い期日をそれは端的に示す。従って、口誦の伝承期が比較的長かつたことは確實で、右に指摘した作者の紛れる蓋然性は高いといつてよいと思われる。

尚、この点に補足すれば、初期万葉の代作歌や先代の天智挽歌群におけるそれとの相異をあげられよう。典型的な代作歌は形式作者とその作品との内実是不可分である。^(注36)作者にふさわしい発想が、当初から実作者に企図されているから。しかるに、当該歌にはそうした配慮が及んでいない。双方の間にはむしろ破綻すら認めること先述した如しである。

それ故、作者の誤伝説こそ二首の実態を説得するといわなければなるまい。ここに実作者たる舍人たちと持統女帝御製という所伝との懸隔に架橋が可能と考へる。

五、結

天武天皇の死を悼む二首の短歌をめぐって、特に一六
一番歌を中心にしての特異な表現に私見を示してきた。挽
歌史に突出した印象を与えるその実態は、陰陽五行説の
思想によつた天武の死の形象と考へられる。そして、か
かる異端な発想が天武の死のみを彩る必然性は、天武と

陰陽道との緊密な結びつきに求めることができる。また、当該歌の実際の担い手にも、ある範囲に限定しうることを述べ、それが持統女帝の御製に紛れる所以も明らかにした。

以上に示してきた天武挽歌の短歌二首に関する試案が妥当なら、天武挽歌は矢張り一回的な独自の位相を挽歌史に占めるといわなければなるまい。通説にいう「女の挽歌」なる仮説はここでも、天智挽歌群同様に全くあてはまらないわけである。新たな天武挽歌群の位相は別の機会に譲り、短歌二首の特異さをこの小論では強調しておくことにとどめる。

注1 平舘英字氏「天武天皇挽歌」(『万葉集を学ぶ 第一

巻』)にこの辺の経緯が詳しい。

2 拙稿「天智挽歌群の論」(古代文学20号)

3 例えば、柿本人麿の歌集をめぐつての論議にこの問題が顕在するが、高野正美氏の以下の批判など筆録者をめぐつては慎重であるべきと思う。(『万葉集の七夕歌』古代文学20号)

4 中西進氏『全訳注原文付万葉集(一)』(講談社文庫)128頁の指摘。尚、具体的な出典として『世説新語』(文学第四)に次の例を見る。

(不易)「不易者、其位也。天在上、地在下、君南

- 面、臣北面、父坐子伏、此其不易也、云々」
- 5 吉井厳氏「青雲放」(万葉5号) 36頁以下
- 6 小嶋憲之氏「万葉集の庖厨に漢籍あり」(国語・国文22巻——7号) 39頁
- 7 山田孝雄氏『万葉集講義I』260頁
- 8 万葉集卷一・一七、一八の額田王の長歌及び短歌
- 9 万葉集卷一四、三五・一五、三五・二〇にこうした発想がある。
- 10 北山茂夫氏『天武朝』239頁
- 11 賀茂真淵『万葉考』(真淵全集第1巻)続群書類従完成会編) 134頁
- 12 西郷信綱氏「柿本人麿」『増補詩の発生 文学における原始・古代の意味』
- 13 注4の同書 128頁の脚注
- 14 吉野裕子氏の一連の研究は特に評価されていい。『隠された神々』 39頁以下に天武朝と陰陽五行説の結びつきについての指摘がある。
- 15 村山修一氏「万葉集と陰陽道」(万葉集講座2『有精堂』) 268頁
- 16 日本書紀、天武元年六月二十四日の条
- 17 日本書紀 天武四年一月一日に陰陽寮を、同月四日には占星台が設置される。
- 18 下出積與氏『道教と日本人』170頁
- 19 隋代までの陰陽五行説を全て網羅した集大成の書
- 『五行大義』に記せられた哲理は抽象的にすぎ、個別な具体例の典拠とはなりえない。
- 20 『太平御覧』巻第五所引の「星」の目、並びに同巻第八所引の「雲」の目の諸用例がこの点を如実に示す。一例を「青雲」にとれば、同書引用の『東方朔伝』らにはこれを兵乱の兆とみる。一方同『礼斗威儀』には大平の予兆とするという具合である。
- 21 『太平御覧』巻第四の「月」、同五、六、七の「星」同八の「雲」を一読されたい。
- 22 注6の同書、46頁
- 23 畢はヒアデス星のこと、箕は二十八宿の一つで、風の神たる星である。
- 24 『詩経』の「離」をかかると訓読し、重さなる意にとる説(目加田誠氏「書経・楚辞」『中国古典文学全集』——平凡社——222頁)もあるが、従わない。尚、注25を参照。
- 25 「月経於箕 則多風、離於畢 則多雨」の記述がある。経、及び離は共に月が星から去って行く有様を示すと解してよい。
- 26 村山修一氏 注15の同書 267頁
- 27 吉田賢抗氏『中国思想史』141頁
- 28 隋代一の陰陽家、肅吉のあり方が死と陰陽五行説の体現者との親密な関係を端的に示す。尚、中村璋八氏校注『五行大義』(中国古典新書)の解説を参照のこと

29 小島憲之氏 注6の同書 40頁

30 『太平御覽』所引「礼斗威儀」に次の例がある。「周成王治平觀於河、青雲浮於河也」周成王が天下を治めていたことのしるしとして青雲が河に認められていたわけである。当該例は神山だが、河でなく山であるメリットもある。「大君は神にし座せば」神岳に盧をするのだから。

31 吉井厳氏 注5の同書 37頁 尚、天武朝が赤を偏重する傾向を有する(村山修一氏 注15の同書 279頁)のは、この場合関係ないと思う。

32 日本書紀歌謡、皇極三年六月の謡歌三首を、同四年六月十二日以降に或る人が大化の改新の兆しと解釈する例など。

33 注28の同書、16頁

34 該当する人物は次の人々に限定される。(A) 書首根麿、書道智徳、調首淡海の帰化系のグループ、(B) 山背直小林、山背部小田の旧豪族のグループ。前者の中では根麿の同族に、文忌寸広麿なる人物があり、彼は後世陰陽家として著名である。家学として陰陽道が伝わっていく可能性が高いから、彼は最有力となる。尚、(B)グループは、観勒に教えを受けた山背臣日立との同族性が立証できた場合の候補者である。

35 拙稿 注2の同書

36 拙稿「初期万葉の代作——歌人の誕生をめぐる

——(成城国文 2号)

(付記) 本稿は一九八〇年、九月上代文学会月例会に口頭発表したものに、加筆訂正を加えたものの一部です。